「Ａ・シャーポフの分離派研究と土壌主義」

阪本秀昭

Хидэаки Сакамото (Почетный профессор университета Тэнри)

«Исследование раскола А. Щапова и почвенничество»

１）シャーポフの分離派研究の紹介

２）土壌主義の区分

シャーポフの研究１）Исследование А. Щатова

- А. Щапов. Русский раскол старообрядчества, рассматриваемый в связи с внутренним состоянием русской церкви и гражданственности в XVII веке и в первой половине XVIII: опыт исторического исследования о причинах происхождения и распространения русского раскола. Казань, 1859.
- 17世紀後半以降、教会固有の分野で古儀式派の霊的指導者によってはじめられた反乱運動は、やがて彼らによって市民的、民衆的生活分野にも拡大され、その運動の先頭に銃兵隊の乱の指導者ホヴァンスキー、農民反乱の指導者ステンカ・ラージン、北方ポモーリエ地方のヴィグ共同体を領導したデニーソフ兄弟といった純粋に民主的な精神における民衆的扇動者、反国家的パルチザンが出現し、活動するようになった。
- 初期の古儀式派が共通して追求していた国民的・市民的民主制、民主的教会制度は、古儀式派の生命力の源泉となり、単一の確固たるロシアの民主的古儀式派的共同体へと向かう発展の指標ともなった。総主教ニーコンがもたらしたロシアにおける新しい制度に対する共通の不満によって鼓舞され、教会権力・国家権力に対する一致した抵抗によって突き動かされた古儀式派は、固有の共同体の力と資力を自己の支配権の拡大と強化に差し向けた。反国家的精神に満ち、何ものにも抑制されることのない自由を謳歌したすべての人々を受け入れた古儀式派共同体は、徐々に初期の不安定性、混乱と動揺を克服して、草庵、隠舎、修道院、大村その他の集住拠点を構築し、これらを相互に結び付けることによって独自の生活圏を形成していった。

シャーポフの研究２）

- シャーポフは、移住・流動し、辺境開発に取り組むロシア民衆の中心勢力の一つとしての古儀式派教徒に注目し、その生活力、創造的能力、身分的平等を求める民主的傾向、経済的潜在力を高く評価した。古儀式派は強固な結合意識と相互協力の精神に満ちた国家内の自立的勢力として、ロシア史に独自の貢献をした。民衆史的立場に立つシャーポフの著書は、歴史家のソロヴィヨフやベストゥージェフ＝リューミンらによって評価されたばかりでなく、ドストエフスキーやアポロン・グリゴーリエフらの土壌主義者に、西欧とは異なったロシア独自の力強い民主的、共同体的発展の可能性を示唆するものとして極めて好意的に受け取られた。
- シャーポフの分離派研究は古儀式派が中心。
- А.П.Щапов, Великорусские области и смутное время (1606-1613). («Отечественние записки», 1861, № 10,11.）
- 各地方の自主的活動とその結果としての大動乱の終息、各地方代表による全国会議におけるロマノフ王朝の誕生について述べるとともに、自立する地方を支える重要な構成要素としての古儀式派教徒にも言及し、彼らのうちに見られる司祭的派傾向と無司祭派的傾向の相互比較を行う。無司祭派は教会制度を否定したために、自らの組織を無から構築していく必要に迫られ、その過程でロシア民衆の伝統的世界観や生活習慣に立ち返り、また民間信仰的要素と接触する機会が多かった。

シャーポフの研究３）

- А.П.Щапов, Земство и раскол I. Сочинения А.П.Щапова. т.1, СПб, 1906.
- А.П.Щапов, Земство и раскол II. Бегуны. Сочинения А.П.Щапова. т.1. («Время»,1862, № 10,11.)
- 第１部　ニーコン総主教とアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の時代以来、ロシアでは国家が直接かかわる分野と地域の自治的分野とが分離し、分離派はそのうち地域の発展の事業を自らに引き受けた。分離派は、古来からの民衆の民主的原理に依拠した新しい地域的共同体、宗派、集会、評議会、総会等を中心とする大ロシアの地域組織を、新たな植民活動、布教活動を通じて発展させる課題を遂行した。
- 第２部　16世紀末から17世紀初めにかけてロシア辺境において逃亡者と浮浪者の群れが増加し、やがて18世紀後半に古儀式派の中に新しい宗派が出現。逃亡者が集中していたヤロスラブリ、ウラジーミル、コストロマ各県において、自由な移動と逃亡運動が下火になり、それに代わって特別な共同体的民主的反対派としての逃亡派、遍歴派が現れた。この宗派は逃亡の原理を教義にまで高め、逃亡に対して宗教的意義を賦与し、逃亡の中に救済への道を見いだした。古い経済的通路や移住経路に代わって、新たに巡礼路が生まれ、この経路に沿って巡礼者を迎え入れ、世話をする世俗の隠遁者が現れた。この巡礼路の中心になったのはヤロスラヴリ県のソペルキ村で、そこからロシア各地に道が伸びていた。
- 中央と各地域が緊密につながり、地域の要求が中央で審議され、衆議をもって議決される体制。

シャーポフの研究４）

- 逃亡派の自主的組織化の動向は、農奴解放が実施され、さらに大きな行政改革が行われようとしていた1860年代前半の政治的思想的風潮の中でドストエフスキーらの関心をとらえ、逃亡派を中心とする古儀式派全体の組織的経済的活動は、ロシアの民衆的世界から生まれた独自の運動としてその将来が有望視された。土壌主義を標榜する思想家たちは、まさにこのような救済論的傾向を持つ組織的運動に期待をかけた。

- А.П.Щапов, Сельская община. («Эпоха», 1862, № 1-6.）
- 村段階の共同体（ミール）から新開地、郷、郡のミール、都市のミール（ヴェーチェ）に至る各段階のミールが存在し、それらは地域社会全体のミールへとまとめ上げられ、さらに地域のミールは全体会議、すなわち全国会議へと統合されると説く。各ミールは文書の交換、直接の全体会議、代表の派遣等を通じて相互に連絡を取り合っていた。このミールのネットワークが地域の自立性を保証していた。

シャーポフの研究５）

- А.П.Щапов, Земство.(«Эпоха», 1862, № 7,8.）
- ロシア古代・中世の農民は、貴族と並んで土地を所有する権利ばかりでなく、世襲地や人の住む部落の所有権も持っていた。豊かな農民は自力で土地を購入し、人をそこに住まわせ、そうでない農民は全ミールで土地を購入する。貧しいものは雇用されるか国有地郷に移住し、共同体的所有に移行した。農奴制が導入、拡大される以前のロシア農村は、あたかも農奴解放後の農村とよく似た状況にあった。

- А.П.Щапов, Городские мирские сходы.(«Эпоха», 1862, № 12.)
- 中世のノヴゴロドやプスコフに存在した自治的ヴェーチェ（都市民会）がピョートル大帝によって導入された都市庁によって置き換えられた結果、それまでの都市自由民的自治の伝統が奪われ、官僚的ギルド・ツンフト的統制が強化された。その結果自治的地域社会、商人と町人の大部分が分離派に接近した。中世自由都市におけるヴェーチェは、分離派の自立的自治的精神と近い関係にあった。

シャーポフの研究6

- А.П.Щапов, Сельский мир и мирской сход. («Эпоха», 1862, № 13-14.)
- 主として郷段階におけるミール共同体の権限について検討。16世紀の郷ミールの権限は極めて大きく、その代表を通じて政府官署権力や土地所有者の行動、彼らによる裁判に規制を加えることができた。郷ミールは農村では最高法院として機能していた。地域住民の間における議論は最終的に郷ミールの判断にかかっていた。農民や商人、町人出身の古儀式派教徒も選出世話人事務所を組織し、協議会（ソヴェート）や自らの集会を開催し、一般の地域住民と同様、地域の住民集会に大きな権限を与える一翼を担っていた。シャーポフはこれらを根拠に、農奴解放後のロシアにおいてもこれら農村ミールが、その自主活動においてできる限り大きな自由を持つべきであると述べている。

シャーポフの研究７

- シャーポフのロシア史論は、村落段階から大きな地方(область)段階にいたる共同体的合議制度が大きな役割を果たし、国家権力の介入にもかかわらず地域の自主的活動が住民の生活に大きな影響を与えてきたことを強調すると同時に、その中における古儀式派教徒を先頭とする分離派の先進的役割に特別な注意を喚起するものであった。分離派勢力は辺境への移住と開発、農業生産の発展、商工業の興隆に身を挺して取り組み、大きな成果をあげた。
- ドストエフスキーらの土壌主義者は、依拠すべきロシアの民衆的伝統をこの分離派の運動の中に見いだし、将来のロシアの自立的発展を牽引する役割を彼らに期待した。シャーポフはこのような政治経済的、社会的側面における分離派運動の中心に逃亡派の組織を見ていた。
- А.П.Щапов, Умственные направления русского раскола. («Дело»,1867, № 10,11,12.）
- スラヴ系諸族とチュード系民族の融合からフィン・大ロシアタイプの民族が形成され、スラヴ的神話・迷信とフィン族の妖術師にまつわる神話・迷信の融合から、混合的チュード・スラヴ的、魔術師・妖術師的世界観が形作られた。古代ロシアやチュード・スラヴの魔術師や妖術師は、やがて神の人（鞭身派）の祈りやラジェーニエの一部を構成することになる異教的崇拝の習慣を保持していた。彼らはいわゆる偶像崇拝的集会を催し、悪魔的な踊りを踊り、悪魔的な歌を歌い、その集会は男女の入り混じる罪深い淫猥な饗宴に終わった。

シャーポフの研究８

- 神の人のセクトはこれらの異教的集会に教義上の位置づけを与え、祈祷集会とラジェーニエに宗教的意義を賦与するだけでよかった。魔術師や妖術師は自然の秘密と自然現象の唯一の理解者であり、民衆の前における唯一の運命の告知者であり、呪術師・祈祷師であり、道徳的善悪の判定者であった。この役割と機能を神人派の預言者、神の人が引き継ぐこととなる。
- 神人派と去勢派の神秘的、汎神論的世界観には、極めて明確なフィン・スラヴ族の異教的自然崇拝の要素があった。去勢派はすべての自然の中に霊魂を見た。
- その自然崇拝的信仰の中で特に重要なのは、太陽と大地に対する崇拝であった。力強い、生命を与える母としての、罪人にとっては恐ろしい母としての太陽、また同じように力強い母としての大地に対する去勢派の信仰は、古代の異教的、フィン・スラヴ的世界観の残存物そのものであった。

◎フィン・スラヴ的アニミズムと呪術性を背景にしたシャーマニズム的世界観が、預言者的セクト＝鞭身派の教義の中に取り入れられた可能性。

土壌主義　第１段階－1）Ф а з а I.

- 連邦主義、自立的地域社会、共同体、ゼームストヴォ　⇔　古儀式派
- 政府・地主からの逃亡、修道隠舎　⇔　古儀式派遍歴派（逃亡派）
- 政治、経済、歴史への関心。モスクワ国家以前のロシアを理想化（アポロン・グリゴーリエフ的観点）。スラヴ派は16、17世紀の中央集権的モスクワ国家を理想化。
- 民衆（土壌）と教養社会の絆を回復する必要。そのためにはゼームストヴォと合流しなければならない。
- ピョートル大帝の改革による民衆と教養社会の分断とその克服へと至る歴史的展望に関しては、シャーポフの歴史観に負うところが大きい。ピョートルによる社会の諸身分への分断にたいして、古儀式派の運動は同質の伝統的文化、調和のとれた社会体制の維持へとむけられていた。→ここから古儀式派をもってロシアの民衆（ゼームストヴォ）を代表させる観点が生まれる。（ドストエフスキーへの影響）

土壌主義　第１段階－２）Ф а з а I.

- シャーポフによると、民衆が求めていた社会体制の理想はブルジョア的性格（ギルドの廃止、商業の自由、身分制の廃止、土地所有権を含む市民的権利の平等）。＋連邦主義
- ドストエフスキーが連邦主義的民主制の観点を維持していたのは1860年代半ばまで。
- 民衆の自立的自己救済への関心
- 共苦、受苦による救済　⇔　古儀式派遍歴派
- 『死の家の記録』の古儀式派老人、ミコルカ
- 土壌主義の古儀式派段階

土壌主義　第２段階－１）Ф а з а Ⅱ.

- 大地崇拝、民間信仰、オルギア的狂宴（ラジェーニエ）　⇔　鞭身派、去勢派、シャーマニズム（シャーポフの言及）
- 自発的受苦、自発的に罪を負うことは、大地母神の前での謝罪、大地への接吻へとつながる。
- 更生と復活による霊的救済、精霊と聖霊への関心。
- 1860年代後半以降。ブルジョア民主主義的観点から保守主義へ、スラヴ派への接近。
- 革命派批判、ピョートル・ヴェルホヴェンスキーと僭称者（イワン王子、スタヴローギン）の利用、救世主の出現への期待。

土壌主義　第２段階－２）Ф а з а Ⅱ.

- 古儀式派からセクトへの関心の移動　→　汎神論、神的存在の憑依、予言、民衆の霊的世界への関心。ロシアの神の探求。全世界的、最古のセクトとしての鞭身派。
- 教養社会の民衆の神秘主義的傾向への接近。
- ソーニャ、リザヴェータ、ラスコーリニコフ、ムィシキン、ロゴージン、ナスターシャ・フィリッポヴナ、マリヤ・レヴャートキナ
- 土壌主義のセクト（鞭身派、去勢派）段階

土壌主義　第３段階－１）Ф а з а Ⅲ.

- 自己抑制、自己制御、謙抑(скромность, снисхождение)。自由と自制。
- 無司祭派（フェオドーシー派）から帰一派に転じた修道僧ゴルーボフ、パーヴェルらの影響、新しい人。
- 1860年代末以降。ツァーリへの期待。民衆にとって皇帝は、自らの魂、自身の精神の体現。反乱は身分の分け隔てがあったときのみ（『悪霊　創作ノート』）。政治的にはダニレフスキーへの接近。
- 更生と復活への関心（神秘主義的傾向）は変わらず。民間信仰的要素は残る。オルギア的要素は希薄化。去勢派に対する態度に変化（スメルジャコフ）。

土壌主義　第３段階－２）Ф а з а Ⅲ.

- 大きな謙抑、自分を無にすること、救済へとつながる（ゴルーボフ）。土壌から離れたものこそ、だれよりも早く生まれ変わらなければならない（スタヴローギン）。民衆の啓蒙の必要。
- シャーポフ批判　→　完成へと至る能力がない。シャーポフは民衆が将来の社会改革において主導的役割を果たすとみなしていたが、民衆を啓蒙する必要があると主張したわけではない。
- 保守的立場からの啓蒙であり、西欧的啓蒙ではない。ドストエフスキーはもともと古儀式派の儀礼主義には批判的、彼は古儀式派の教義を支持していたわけではなかった。
- シャートフ、スタヴローギン、チホン、マカール老人、ゾシマ長老、アリョーシャ（子供たち）
- 土壌主義の帰一派段階

各段階の土壌主義　土壌＝ロシア民衆
Почвенничество на разных стадиях

Ｉ　古儀式派（西欧派とスラヴ派のジンテーゼ）　受苦、共苦

分離派（中心は古儀式派）をもってロシア民衆を代表させる見地（シャーポフの影響）

II　セクトとシャーマニズム（古代、全世界への拡大）　霊的復活、霊的救済

ロシア民衆の民間信仰世界（ロシアの神、ロシアのキリスト）

教養社会の民衆への接近

III　帰一派（分離派と正教会とのジンテーゼ）　謙抑、自己統御、生まれ変わり

ロシア正教とつながる民衆（ツァーリは民衆とともに歩んできた）（ゴルーボフらの影響）

教養社会による民衆の啓蒙

参考文献

・三浦清美『中世ロシアの聖者伝(一)―モスクワ勃興期編』松籟社、2023 年。
・内村剛介『人類の知的遺産　51　ドストエフスキー』講談社、1978 年。
・江川卓『謎解き『罪と罰』」新潮選書、2013 年。
・江川卓『謎とき『白痴』』、新潮選書、1994 年。
・江川卓『謎とき『カラマーゾフの兄弟』』、新潮選書、1991 年。
・亀山郁夫『謎解き『悪霊』』新潮選書、2012 年。
・清眞人『ドストエフスキーとキリスト教　イエス主義・大地信仰・社会主義』藤原書店、2016 年。
・山城むつみ『ドストエフスキー』講談社、2011 年。
・勝田吉太郎『近代ロシヤ政治思想史』1961 年、創文社。
・『文章読本　ドストエフスキーⅡ』河出書房新社、1978 年。
・江川卓『ドストエフスキー』1984 年、岩波新書。
・井桁貞義『ドストエフスキー』1989 年、清水書院。
・M.エリアーデ著、堀一郎訳『シャーマニズム　古代的エクスタシー技術』冬樹社、1985 年。
・ミルチャ・エリアーデ著、風間敏夫訳『聖と俗　宗教的なるものの本質について』法政大学出版局、1983 年。
・ V.V.イワーノフ、V.N.トポローフ著、北岡誠司訳『宇宙樹・神話・歴史記述』岩波現代新書、1983 年。
・マックス・ウェーバー著、中山元訳『世界宗教の経済倫理　比較宗教社会学の試み　序論・中間考察』日経ＢＰ社、2017 年。
・セルゲイ・タラネツ著、阪本秀昭訳「司祭派の展開」、阪本秀昭・中澤敦夫編著『ロシア正教古儀式派の歴史と文化』明石書店、2019 年。
・安村仁志「古儀式派と諸宗教セクトとの関係（２）」『中京大学教養論集』第 33 巻第 3 号、1993 年。
・ヨコタ村上孝之「古儀式派とセクト」阪本秀昭・中澤敦夫編著『ロシア正教古儀式派の歴史と文化』明石書店、2019 年。
・N.M.ニコリスキー著、宮本延治訳『ロシア教会史』恒文社、1990 年。
・オリガ・ディラクトルスカヤ「ドストエフスキーと去勢派　『女主人』の解釈に寄せて」（越野剛訳）『現代思想』38 巻 4 号（2010 年）
・望月哲男「包摂と排除　『カラマーゾフの兄弟』における教会裁判と古儀式派のテーマ」貝澤哉・杉浦秀一・下里俊行　編『＜超越性＞と＜生＞との接続』水声社、2022 年 3 月、pp. 81-112
・前田和泉「詩的神話の誕生　～ツヴェターエワの『山の歌』～」『Slavistika』東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報 11, 2017 年。
・坂下将人「Φ.M.ドストエフスキー『悪霊』―「鳥」に関する一考察」345 頁。

http://repository.nihon-u.ac.jp/xmlui/handle/11263/1856）（2023 年 1 月 23 日閲覧）
・阪本秀昭「ロシア革命における古儀式派－イヴァノヴォ・ヴォズネセンスクの労働運動―」2019 年 11 月『アリーナ』風媒社、第 22 号。
・阪本秀昭「モスクワ東部オレホヴォ・ズーエヴォにおける古儀式派教徒の労働運動」、井桁貞義、伊東一郎、長與進編『スラヴァンスキイ・バザアル』水声社、2020 年 12 月。
・阪本秀昭「工場労働と周辺の古儀式派農村の相互関係―グスリツィ地方の事例を中心に―」2021 年 3 月『Север セーヴェル』第 37 号。
・長縄光男「ゲルツェンとドストエフスキー」（予備的考察）『ロシア思想史研究』2018 年、第 9 巻。https://doi.org/10.18880/00012816
・ドストエフスキー著、江川卓訳『罪と罰』（上）、岩波文庫。
・ドストエフスキー著、江川卓訳『罪と罰』（中）、岩波文庫。
・ドストエフスキー著、江川卓訳『罪と罰』（下）、岩波文庫。
・ドストエフスキー著、木村浩訳『白痴』（上）、新潮社、1970 年。
・ドストエフスキー著、木村浩訳『白痴』（下）、新潮社、1970 年。
・ドストエフスキー著、江川卓訳『悪霊』（上）、岩波文庫、1971 年。
・ドストエフスキー著、江川卓訳『悪霊』（下）、岩波文庫、1971 年。
・『ドストエフスキー全集 1 』新潮社、1969 年。
・『ドストエフスキー全集 18、作家の日記（Ⅱ）』新潮社、1980 年。
・『ドストエフスキー全集 19、作家の日記（Ⅲ）』新潮社、1980 年。
・『ドストエフスキー全集 21、書簡（Ⅱ）』新潮社、1979 年。
・『ドストエフスキー全集 22、書簡（Ⅲ）』新潮社、1980 年。
・『ドストエフスキー全集 24、評論（Ⅰ）』新潮社、1979 年。
・『ドストエフスキー全集 25、評論（Ⅱ）』新潮社、1980 年。
・『ドストエフスキー全集 26、創作ノート（Ⅰ）』新潮社、1980 年。
・ゲーテ著、高橋義孝訳『ファウスト』第一部、新潮文庫、2020 年。
・ゲーテ著、高橋義孝訳『ファウスト』第二部、新潮文庫、2020 年。

・Достоевский, Ф.М. Полное собрание сочинений в тридцати томах. т.7, Л., 1973.
・Достоевский, Ф.М. Полное собрание сочинений в тридцати томах. т. 9, Л., 1974.
・Попов, А.С. Русское сектантство. М., 2012.
・Зеньковский, С. Русское старообрядчество. Минск, 2007.
・Нечаева В. С. Журнал М. М. и Ф. М. Достоевских «Время». 1861—1863. М.: Наука, 1972.
・Нечаева В. С. Журнал М. М. и Ф. М. Достоевских «Эпоха». 1864—1865. М.: Наука, 1975.
・Долинин А.С. Достоевский и другие. Л., 1989.
・Кирпотин, В. Достоевский в шестидесятые годы. М., 1966.
・Аполлон Григориев. Эстетика и критика. М., 1980.

・Снегирев, И.В. Русские простонародные праздники и суеверные обряды. Вып. 2, М., 1838.
・Стрельбицкий Г. История русского раскола. Одесса. 1898.
・Ливанов Ф. В. Раскольники и острожники. Очерки и рассказы. Тома 1-4. Спб., 1869-1873.・Страхов Н.Н. Критические статьи (1861-1894). т. 2. Киев, 1902.
・Материалы по вопросам земельному и крестьянскому. Всероссийский съезд крестьян-старообрядцев в Москве, 22-25 февраля 1906 года. М., 1906.
・Смирнов, П.С. История русского раскола старообрядства. С.-Петербург, 1895.
・Полное собрание сочинений Никольского единоверческого монастыря настоятеля архимандрита Павла. Т. 2. М., 1897.
https://azbyka.ru/otechnik/Pavel_Prusskij/polnoe-sobranie-sochinenij-nikolskogo-edinoverchesskogo-monastyrja-nastojatelja-arhimandrita-pavla-tom-2/
・Щапов, А.П. Русский раскол старообрядчества, рассматриваемый в связи с внутренним состоянием русской церкви и гражданственности в XVII и в первой половине XVIII. Казань, 1859.
・Щапов, А.П. Земство и раскол Ⅰ. Сочинения А.П.Щапова. т.1, СПб, 1906.
・Щапов, А.П. Земство и раскол Ⅱ, Бегуны. Сочинения А.П.Щапова. т.1.
・Щапов, А.П. Великорусские области и смутное время (1606-1613). Сочинения А.П.Щапова. т.1.
・Щапов, А.П. Сельская община. Сочинения А.П.Щапова. т.1.
・Щапов, А.П. Земство. Сочинения А.П.Щапова. т.1.
・Щапов, А.П. Городские мирские сходы. Сочинения А.П.Щапова. т.1.
・Щапов, А.П. Сельский мир и мирской сход. Сочинения А.П.Щапова. т.1.
・Щапов, А.П. Умственные направления русского раскола. Сочинения А.П.Щапова. т.1.
・Варенцов, В. Сборник русских духовных стихов. СПб., 1860.
・Кельсиев, В. (Сост.), Сборник правительственных сведений о раскольников. Вып., 2, Лондон, 1861.
・Кельсиев, В. (Сост.). Сборник правительственных сведений о раскольников. вып. 3, Лондон, 1862, Прибавление.
・Кельсиев, В. (Сост.), Сборник правительственных сведений о раскольников. Вып., 4, Лондон, 1862.
・Старообрядческий церковно-общественный журнал «Церковь». № 4, 5, 8, 51. 1909 г.
・Миллер, Н.В. Исследование шаманизма в зарубежной историографии. «Омский научный вестник» март, 2000 г.
・Керов, В. Земля трудящемуся народу: Аграрный вопрос в политической программе старообрядцев // Quaestio Ruccica. Т. 7, 2019, № 4.
・Архипова, Е.А. (2012) Из истории изучения роли старообрядцев в развитии экономики России (конец XIX-начала XX в.) // Вестник РГГУ. Литературоведение. Языкознание.

Культурология. № 4, 2012,
・Ивановский, И.И. Секта хлыстов в ее истории и современном состоянии. https://azbyka.ru/otechnik/Nikolaj_Ivanovskij/sekta-hlystov-v-ee-istorii-i-sovremennom-sostojanii/）（2023 年 1 月 24 日閲覧）
・Снигирева С.Д. — Хлыстовщина в контексте почвеннических воззрений Ф. М. Достоевского // Litera. – 2020. – № 1. DOI: 10.25136/2409-8698.2020.1.31986 URL: https://nbpublish.com/library_read_article.php?id=31986
・Снигирева С.Д. — Историософские воззрения Ф. М. Достоевского и демократическая концепция раскола А. П. Щапова // Litera. – 2020. – № 5. DOI: 10.25136/2409-8698.2020.5.32888 URL: https://nbpublish.com/library_read_article.php?id=32888
・Снигирева С.Д. — Идея принятия страдания в творчестве Ф.М. Достоевского и ее связь с тематикой раскола и мифом о земле.//cyberleninka.ru/article/n/ideya-prinyatiya-stradaniya-v-tvorchestve-f-m-dostoevskogo-i-ee-svyaz-s-tematikoy-raskola-i-mifom-o-zemle
・Снигирева С.Д. —Старообрядчество и сектантство в творчестве Ф. М. Достоевского. АВТОРЕФЕРАТ диссертации на соискание ученой степеникандидата филологических наук. //https://www.prlib.ru/item/1324990
・Буданова, Н.Ф. Павел Прусский и его книга «Беседы о пришествии пророков Илии и Эноха, об антихристе и седминах Даниловых» (Новые материалы к теме «Достоевский и старообрядчество»)// Достоевский. Материалы и исследования. Т. 18. СПб.: Наука, 2007. ・Агашина, Е.Н. Раскольников и «наполеоновы» (К теме раскола в романе Ф. М. Достоевского «Преступление и наказание»// Гуманитарные исследования в Восточной Сибири и на Дальнем Востоке. Владивосток: Издательство ДВГТУ, 2011
・Карпачева, Т.С. Образы сектантов в «Дневнике писателя» Ф.М. Достоевского// Проблемы исторической поэтики. 2014. Т. 12.
・Дилакторская, О. Г. Скопцы и скопчество в изображении Достоевского (К истолкованию повести «Хозяйка»)// Philologica. 1995. Т.2. № 3-4.
・Соколова, В.Ф. Тема церковного раскола в публицистике и художественном творчестве, Ф.М. Достоевского// Старообрядчество: история, культура, современность, т. 2. М., 2005.
・Tetsuo Mochizuki, Вокруг дискуссий о церковном суде в «Братьях Карамазовых» Mundo Eslavo, 16 (2017).
・Баршт, К. А. «. . . исходил, благословляя, папа-антихрист». Об одной парадоксальной формулировке в подготовительных материалах к роману Ф. М. Достоевского «Бесы». Новый филологический вестник. 2019. №2(49)
・Баршт, К.А. «Реализме в высшем смысле» и символе веры Ф. М. Достоеского» https://doi.org/10.19272/201707201002

・Баршт, К.А. О концепте почва в трудах старших славянофилов и в творчестве Ф.М.Достоевского 1860–1870-х гг. Вестник Санкт-Петербургского университета. Язык и литература. 2022, 19 (1): https://doi.org/10.21638/spbu09.2022.10
・Саису, Н. Ф. М. Достоевский и К. Е. Голубов. Неизвестный Достоевский.2022;9(4): DOI: 10.15393/j10.art.2022.6483
・Воронцова, В.И. Константин Голубов – «новый человек» Ф.М. Достоевского. Автореферат. СПб., 2019.
・Фатеев, В.А. А было ли "почвенничество"? : полемические заметки. http://dspace.bsu.edu.ru/handle/123456789/44353
・Карпачева, Т.С. Образ хлыстовского "пророка" в творчестве Ф. М. Достоевского и И. С. Тургенев. https://cyberleninka.ru/article/n/obraz-hlystovskogo-proroka-v-tvorchestve-f-m-dostoevskogo-i-i-s-turgeneva
・Вишленкова, Е.А. Проблема церковного раскола в трудах А.П. Щапова. Автореферат. Казань, 1992.
・Тоичкина, А.В. Н.Н.Страхов, журнал Заря и творчество Ф.М.Достоевского конца 1860-х гг. Вестник Санкт-Петербургского университета. Язык и литература. 2021,18 (3): https://doi.org/10.21638/spbu09.2021.304
・Захаров, В.Н. Почвенничество в русской литературе: метафора как идеологема. https://cyberleninka.ru/article/n/15308615.pdf
・Захаров, В.Н. Идея Достоевского: усиленное познание России как задача образования. https://cyberleninka.ru/article/n/ideya-dostoevskogo-usilennoe-poznanie-rossii-kak-zadacha-obrazovaniya
・Васильев, А.А. Национальная почва в мировоззрении Ф.М. Достоевского, А.А. Григорьева и Н.Н. Страхова. https://core.ac.uk/download/pdf/151231788.pdf
・Гуидо Карпи. Достоевский-экономист. Очерки по социологии литературы. М., 2012. https://www.labirint.ru/books/330344/
・Алексеева, Л. В. Вопрос о расколе в журналах Время» и «Эпоха» (1861–1865) // Неизвестный Достоевский. 2021. Т. 8. № 1. DOI: 10.15393/j10.art.2021.5281